

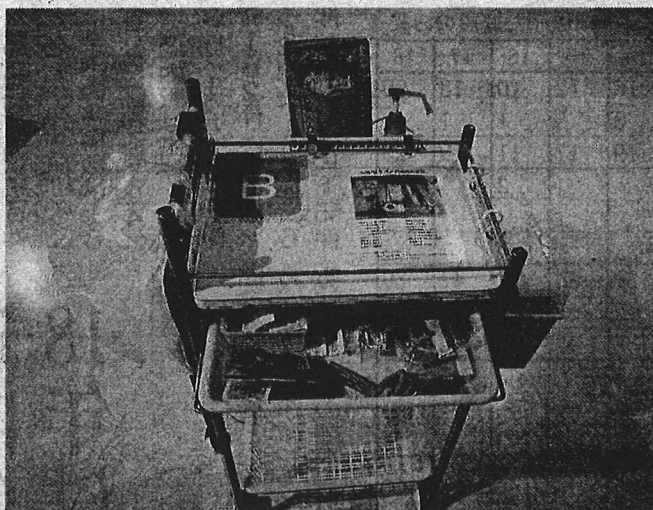
救患の誤認 ゼロ実現へ

札幌白石記念

搬送直後にカードで識別

白石区の札幌白石記念病院（野中雅理理事長、宮田節也院長・103床）は、救急患者の受け入れに際し、視覚的に見分けられるよう識別・色分けしたカードを活用。安全で円滑な患者対応につながるよう、誤認ゼロに取り組んでいる。

同病院は、脳神経外科、循環器内科主体の急性期病院として、24時間処置室1室で、3台のス



識別・色分けした可動式の処置用ワゴン

トレッチャーを用い、電子カルテでオーダーし印刷された指示書を医師の机に置いていくが、患者と間違えて返事をするケースなどもあり、家族の誤認が発生することもあり、誤認につながる恐れがあった。

患者の所持品は、全て室内に据え付けた大型の処置用ワゴン1台に置いていたが、患者が外した義歯、眼鏡、時計などの所持品が入り交ざるほか、混雑時には置き場所が定まらず、処置業務や物品の確保が円滑に進まないという課題もあった。

付き添い家族の控室はなく、廊下で待機しても

も確認できるようカード「A」「B」「C」の識別を貼付し、バーコード、名前、生年月日、過去の受診歴における禁忌事項などが記載された来院時伝票や指示書などの書類も、色別けたファイルに入れて取り付けた。

患者一人一人が専用で利用できる、キャスター付きのコンパクトな処置用ワゴンを新規導入し、カードとともに衣類なども取り付けることとした。

最上段のトレイに初期対応物品を収納。2段目のトレイには患者の所持品を保管し紛失防止を図っている。患者対応後は即時に初期対応物品の補充など次の患者を受け入れる準備を行うことで、確実な初期対応が可能になったほか、ワゴンは狭い処置室内で自由に移動でき、仕事の効率化につながっている。

付き添い家族には、担当看護師が患者到着時に

ようにした。

患者の個別化は全職員にフローチャートで周知。付き添い家族の協力により搬送直後からスムーズに活用できたという。円滑な患者対応が可能になり、職員の誰もが間違いに気づき指摘できることから、誤認ゼロを達成できた。

取り組みは道厚生局医療安全に関するワークショップのシンポジウムで有効性、実用性、独創性が評価され、2019年度ベストプラクティスを受賞。

医療安全管理責任者の辻真紀子救急外来看護主任は、「全職員に意識付けし共有できたことで、迅速性を損なわずに誤認防止が実現できた」とし、今後も誤認ゼロ継続を目指していく考えだ。